

2/13

【第三種郵便物認可】

任天堂株の大きいわいで持ちきりだった12日の株式市場。実は任天堂のような復活ぶりを見せた銘柄はほかにもある。これらの「遅れてきた主役」は、海外発のニューズや金融・財政政策期待で揺れ動く日本株の本格復活の担い手となるのか。

「次の任天堂」を探せ

「波が来ると踏んでいたが、ここまで一気に上がる」と、次の任天堂とは。運用会社の日本株を担当者は2日間で4割高を演じた任天堂に驚きを隠さなかった。

ディー・エヌ・エーとの協業アプリを配信するタイミングでの投資を考えていたものの、今回はあまりの急な上げに指をくわえていただけ。だが「構造改革が

実を結びそうな企業はたくさんある」と、次の任天堂を虎視眈眈（こしたんた）と狙う。

スクランブル

「復活組」の株価の戻りが目立つ
(▲は下落または減少)

銘柄名	昨年末比 株価騰落 率 (%)	時価総額 の増減
任天堂 ※	36.3	▲5割
レンゴー ※	31.5	▲3割
資生堂 ※	17.4	▲1割
スクエニHD	13.5	微増
トクヤマ	9.1	▲8割
日製鋼	8.7	▲5割
ヤマダ電	5.0	▲5割
ソニー ※	4.6	▲3割
大日印 ※	0.2	▲4割
日経平均	▲15.4	1割

(注) ※は11～12日に年初来高値を付けた銘柄。時価総額の増減は2006年末と昨年末の比較。日経平均の時価総額は東証1部全体

収益構造の転換にもがいてきた企業が、最近になって市場で注目を集めている。11～12日に年初来高値を付けた銘柄には、建設株など政策期待で買われやすい業種に混じり、資生堂やソニーなどが顔を出した。2012年以降の「アベノミクス」相場に乗り遅れたが、収益改善の糸口がようやく見えてきた銘柄群だ。日経平均が今と同じ1万6000円台だったのは約10年前。このときと比べて時価総額が大きく減っていた銘柄ほど、今年は逆行高になっていく傾向がある。例えば、段ボール大手のレンゴーだ。昨年末時点の時価総額は06年末から3割も減っていた。それが生産拠点の再編で16年3月期は6期ぶりの営業増益に転じたことで見直され、株価は

復活銘柄に集まる期待

上場企業全体の業績は今期、曲がり角にさしかかる。日経平均を1つの銘柄とみなした場合の予想1株利益は現時点で5年ぶりに減る見通し。円高で収益圧

昨年末比で31・5%上昇した。大日本印刷は印刷や液晶関連の落ち込みで前期まで2期連続の営業減益に見舞われ、時価総額は一時、ライバルの凸版印刷に抜かれた。今期は、生産再編や本社機能の集約などの合理化効果がやっと浸透し始め、6%増益の見通し。有機EL技術など新規事業への期待も加わり、株価は12日に年初来高値を付けた。

世界の株式市場ではリスクオンの雰囲気も漂う。だが欧州金融機関の経営問題など不安材料が消えたわけではなく、「相場の潮目が大きく変わったとはいえない」(アリアンツ・グローバル・インベスタース・ジャパンの寺尾和之取締役)。

自力で復活を模索する企業への資金流入は、円安頼みの相場を脱しようとする日本株の姿と重なって見える。(富田美緒)

